OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	船場
Author(s)	宮本, 又郎
Citation	懐徳. 1985, 54, p. 51-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〔講座講演より〕

船　場

宮本又郎

一　船場の成り立ち

「船場」とは、北は大川、土佐堀川、南は長堀、東は東横堀、西は西横堀に囲まれた矩形状の地域を指す総称である。ただし、西横堀、長堀は埋立てられていまは存在しない。江戸時代は本町以北は大坂三郷北組、以南は南組に属し、それぞれ北船場、南船場といわれたが、現在は博労町一～五丁目以北は東区に、南船場一～四丁目は南区に属している。また、船場を「中船場」と呼ぶときがあるが、これは西横堀以西の「西船場」もしくは「下船場」、上町地区の「東船場」に対する呼称である。

「船場」の地名は、船の字を音読し、場の字を訓読する重箱読みである。その名の由来については、浪華の湊の船着き場であることによるという説、古来、戦場となることが多かったからであるという説、豊臣時代外郭で、馬を洗う場―洗馬であったからという説、波が打ち寄せる「千波」であったという説、相場を立てる所＝羅場説など、諸説がある。

船場は大阪、いや日本を代表するビジネス・センターであるが、それが商業地としての輪郭をあらわすようになったのは、江戸初期のことである。天正十一年（一五八三）大坂に入った秀吉は大坂城を建設するとともに、市街地の整備を行った。生玉、玉造、渡辺を城下の中心とし、さらに天満や、砂洲地帯であった船場、島之内が開拓された。同時に市中堀川の開削に着手した。東横堀川、天満堀川、阿波堀川、西横堀川は一五九〇年代より開削され、慶長五年（一六〇〇）までには完成した。これらの整備された街区に堺・平野・阿波・土佐の商人が

堀川の開削状況と大坂市街の整備

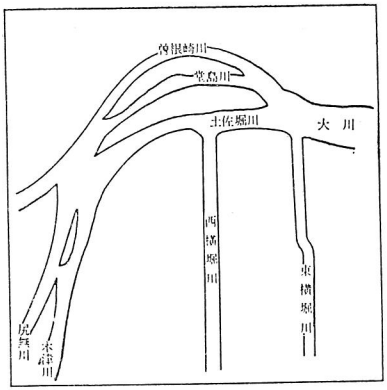


図２　慶長３年の頃

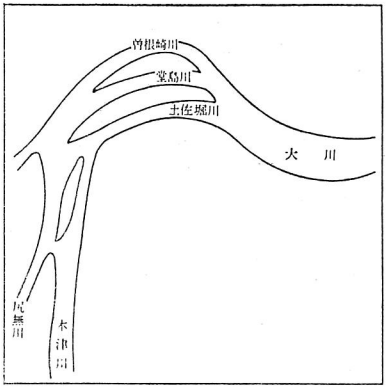


図１　築城以前の淀川

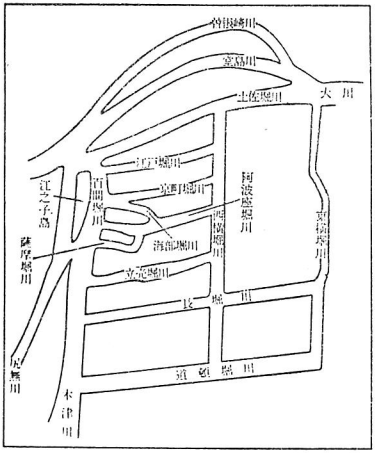


図４　寛永７年

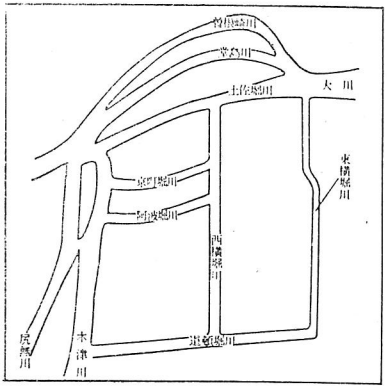


図３　元和３年

出所　図１～図４は大阪町名研究会編『大阪の町名』より

来往し、大城下町の姿容がととのうようになった。土佐堀、阿波堀はそれぞれ土佐商人、阿波商人に由来するものである。

大坂両陣で大坂は灰燼に帰したが、落城後家康の外孫松平忠明が元和元年（一六一五）大坂城主として入り、同五年大和郡山に移封されるまでの五年間、市街復興に力を尽した。大坂城旧三の丸地域が市街地として開放され、そこに伏見町人が誘致された。船場・島之内は町割がなされ、下水道も通って、市街地として一層整備された。伏見町人もしだいに上町から船場、下船場に分散して居住するようになった。堀川の開削もさらに進み、道頓堀川（一六一五）、京町堀川（一六一七）、海部堀川（一六二四）、長堀川（一六二五）、立売堀川（一六二六）、薩摩堀川（一六三〇）などが開削された。こうして、運河網がさながら今日の市内高速道路のように市中にめぐらされ、物資移動の大動脈となり、「出船千隻、入船千隻」の「水の都」と呼ばれる近世大阪の景観を造り出すことになった。そして、船場はその中心として、一六一〇～二〇年代に、その姿を現わすにいたったのである。堀川の開削状況と船場の成立過程を図示すると、図1～図4のごとくとなる。

秀吉時代には東横堀川以東が「大坂中」と呼ばれていたが、船場や下船場に町域が拡大するに伴い、町人の自治組織たる町組が設置されるようになった。元和年間（一六一〇年代）に本町通りを境に北組と南組が置かれ、やや遅れて大川以北の地に天満組が設けられた。江戸初期には上町地区に伏見組が存在したが、十七世紀中ごろまでに南・北両組に分属させられ、以後大坂の町制は大坂三郷の体制で運営された。町組の各組には惣会所が置かれ、惣年寄、惣代らがそこに詰め、町奉行から三郷への触書、口達などを町民に伝達するとともに、町人自治を行っていた。先述の通り、船場は北組と南組に所属していたが、北組の惣会所は元和二年平野町八丁目（現平野町四丁目）に、南組の惣会所は元和八年本町十丁目（現本町四丁目）に設置された。ただし、後者はのち南農人町一丁目に移転した。

二　船場の町割り

船場における街路はもともと大坂城周辺上町地区と西の海港をつなぐ東西ルートを主要交通路とし、南北ルートは従とされていた。東西のルートは通りと呼ばれ、江戸期には四・三間（約八メートル）幅の道路が二十四本

図5　船場界隈　『新撰名所繁栄大阪案内図　大正三年』より

走り、他方、南北のルートは筋と呼ばれ、東西ルートと直交して、三・三間（約六メートル）幅の道路が十三本走っていた。東西の通りが幹線であったのは、大坂が大坂城を起点として造られた町であったこと、東国と西国との交通の要路にあたっていたこと、大坂湾からの西風の通風性が良かったこと、などによる。

東西の通りを暗誦するために、つぎのような古歌があった。「浜梶木、今は浮世と高伏道、平野淡路、瓦備後安土本町、米屋唐物、久太久太に二久宝、博労順慶、安堂塩町、浜」。船場の町名はこの通り名と一致するものが多い。

他方、南北の筋は、東から寺屋町筋、板屋町筋（一丁目筋）、八百屋町筋、堺筋、難波橋筋（藤中橋筋）、中橋筋、三休橋筋（栴檀木橋筋）、井池筋、心斎橋筋、淀屋橋筋（御堂筋）、御霊筋（佐野屋橋筋）、渡辺筋（魚の棚筋）、横堀であった。このうち、板屋橋、中橋、三休橋、心斎橋は、戦後埋立てられた長堀に架けられていた橋の名である。

船場の地割りは原則的には「通り」と「筋」に囲まれた京間四〇間（約七十九メートル）四方を一ブロックとする碁盤状のパターンをなしていた。もっとも、淀屋小路や浮世小路など二〇間割のところもあった。四〇間四方は江戸や京都が六〇間四方であったのに比べ狭い地割りであるが、この船場の地割りは難波京の条坊地割りに由来するとも、伏見の地割りに由来するともいわれる。

四〇間四方の中央に三～五尺の溝があり、これが町境となっていた。溝をはさんで、各屋敷が背中合せに接していた。したがって、各屋敷は奥行約二〇間となる。間口は原則として一〇間であった。それゆえ四〇間四方の各ブロックに一〇×二〇間の屋敷地が、八つ設けられるというのが基本型であった。しかし、あくまでこれは基本型であり、実際には間口の方は次第に細分化が進んだ。元禄十三年（一七〇〇）の『大坂北組・南組・天満組水帳町数家数役数寄帳』によると、北組中船場には六十六町一九九二軒、南組中船場には六十六町二三四八軒の屋敷が存在した。基本ブロックが、二七六（十二×二十三）あるとすると、一ブロックあたり十五・七軒ということになる。奥行二〇間が動かないとすると、一軒あたり間口は五間程度となるのである。

ブロック中央の溝は町境であるとともに、排水溝の役目を果し、この排水溝は東西両横堀につながっていた。以上述べたように、船場では一ブロックの中央で町名が

分かれており、東西の通りをはさんで南北の屋敷地に同一の町名がつけられていた。いわゆるストリート町名であったわけで、通行人にとっては、ブロック町名よりも便利であった。

江戸時代に成立した船場の地割りは基本的には今日まで受け継がれているが、明治以降市電の開通、都市計画などにより、道路の拡幅はいくたびと行われた。市電の第一期線築港線が開通したのは明治三十六年のことであるが、船場地区関係では、東西線（花園橋―末吉橋）と南北線（梅田―恵美須町）が明治四十一年、北浜天満線が四十四年、堺筋線が四十五年、勤本町線が大正二年、天満橋西筋線が大正四年に開通した。市電軌道敷設に伴い、これらの道路は八～十二間（一四・五～二一・八メートル）に拡幅された。堺筋線は、もともと旧難波橋筋に敷設される計画であったが、道路が拡幅されると町がさびれるとの住民の声が強かったので、堺筋敷設に変更され、それに伴って、旧難波橋はひとつ西の筋、堺筋につけ替えられた。その後、堺筋には三越のほか、白木屋、高島屋、松坂屋などのデパートが立ちならぶようになり、大阪の一大メインストリートになった。

大正九年都市計画が施行されて以来、都市計画事業によって、御堂筋、三休橋筋、大川町通り、平野町通り、久宝寺町通りなどの道路拡幅が行われた。なかでも、昭和十一年竣工した御堂筋拡幅工事は、幅三・三間の淀屋橋筋を幅二四間（四三・六メートル）の大動脈に変える大工事であった。新たに土地を買収して拡げられたのは主として道路の東側であった。また、都市計画事業によって、市中の木造橋の多くが耐久構造橋に付け替えられた。また、いわゆる「軒切り」＝路幅整理も行われ、凸凹をきたしていた道路の境界線が整理された。明治以降の道路の拡幅・整理は東西の通りよりも、南北の筋を中心に行われてきたため、船場地区はかつての東西の流れ中心から南北の流れ中心へと様相を変えるにいたった。

戦後は自動車交通が著しく増加し、その対策として道路の整備が進んだ。三十六年から四十一年にかけて市電が廃止され、長堀の埋立て、中央大通りの建設、西横堀の埋立て、東西両横堀川上の阪神高速道路の建設などが行われた。かつての水の都の象徴であり、市中の川船水路となっていた堀川の多くは消滅し、高速道路と地下鉄がそれにとって代ったのである。

三　船場の町々歴史散歩

先に述べた通り、元禄十三年には船場には一三二か町が存在した。そして、この町割、町名は江戸時代を通じて変わらなかった。

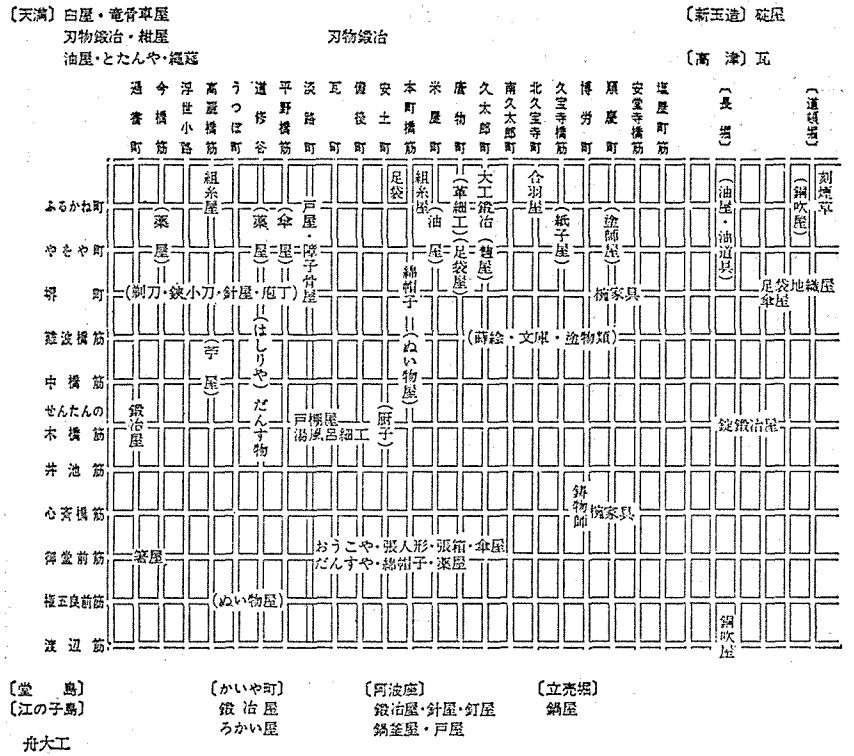
大阪の町名の改正が大規模に行われたのは明治五年三月のことであった。すなわち、明治二年大阪三郷の制は廃され、東・西・南・北の大組が置かれることになったが、さらに五年三月十七日、東西南北の四大組のもとに七九区がおかれ、さらに町名の廃合、改称が行われた。町数は六二一か町から五三二か町に減じられ、実情に即した町割が実施されることとなった。そのうち、船場は東大組第十二区から第二十三区までと南大組第五区と第六区に属することとなり、あわせて一〇九か町となった。その後、明治・大正・昭和および戦後を通じて、大阪市では度重って町名の改廃称が行われ、また近年では「住居表示に関する法律」により、町名の改称が進められてきたが、船場地区ではわずかな例を除いて、明治五年の町制、町名が今日まで踏襲されている。明治五年の改正により、船場では、単独町名が少くなり、通し町名（一丁目、二丁目といった町名）が多くなり、街路と町名が合致し、便利となっていたこと、由緒ある町名が多く、改変には抵抗や不便が伴うこと、などがその理由であろう。船場地区は大阪では珍しく碁盤上の地形をなし、町名も市民の間に定着しているから、ブロック町名主義にあえてとらわれることなく、今後もこのまま町名を存続させるのが利巧であろうと思われる。

さて、船場は江戸期以来大阪の中心的ビジネスセンターである。概観すれば、江戸期には、北浜・今橋などの北船場＝北脇には両替商、呉服商、道修町には薬問屋、伏見町には唐物問屋、備後町・安土町には木綿太物問屋が多かった。江戸時代の産業地図を描くと図6のようになる。現在でも、北浜には金融・証券、本町には繊維関係、井池には繊維の現金問屋、道修町には薬品、南久宝寺には小間物―雑貨の会社や問屋が集住する。

以下、船場の主な町の歴史散歩をしてみよう。

北浜一～五丁目　北浜は大川沿いの北の浜という意であり、大川沿いの外北浜とその一つ南の通りの内北浜からなる。江戸期には北浜一～二丁目のほか、過書町・梶木町の町名があり、より古くには大塚屋町、さかい町などの町名があった。過書町は過書船（伏見―京橋間の船）の船頭・船持が住んでいたことに由来するといわ

図6　大坂産業地図（『難波鶴』『万買物調方記』）



脇田修教授の作図による。

れ、現在の北浜三丁目にあたる。また梶木町は現在北浜五丁目あたりで、船の楫の木を売る店が多かったことに由来すると伝える。史跡としては、金相場会所跡（現大阪証券取引所の地）俵物会所、適塾、銅座、帝国座などがあり、また、北浜一丁目の土佐堀川と東横堀川が交わる三角形の地は古くは蟹嶋新地と呼ばれ、料亭・旅館が連なっていた。そのうち専崎楼・花外楼は明治八年大阪会議が開かれた場所としてよく知られている。町人学者山片蟠桃を出した両替商升屋、風流人平瀬露香を生んだ両替商千草屋も当町に存在した。

大川町　古くは十三人町および浜四丁目と呼ばれていたが、延宝七年（一六七九）両町を併せて大川町となった。当町は江戸初期の豪商淀屋の屋敷があった町として知られる。淀屋の祖岡本常安与三郎は山城岡本の出で、大川付近に居を構え、材木商を営んだが、大坂の陣に際し徳川方に組し、その功により、様々の特権を得、致富をなした。二代目言当は大川町の店前で米相場をたてた。これを淀屋米市、北浜の米市といい、享保十五年（一七三〇）公許された堂島米市の前身にあたる。淀屋が米市の便のために架けた橋が淀屋橋である。五代目と比定される辰五郎は宝永二年（一七〇五）驕奢によって闕所処分を受け、淀屋は亡んだ。いまも淀屋小路という通りがあるが、これは淀屋邸の裏口とも邸内小路ともいう。淀屋の屋敷跡には現在石碑がたてられている。明治二十年ごろまでは大川町は船着場として栄え、旅館や料理屋が多かったが、明治十七年日本銀行大阪支店（三十八年に現在地に移転）が設置されたころから、徐々に風情はかわり、明治四十一年住友ビルが建設されて以降は今日まで住友グループの本拠地となった。

横堀一～六丁目　江戸期には七郎右衛門町、七軒町、浜町、長浜町、椹木町、西笹町と呼ばれていた。七郎右衛門町は西横堀の開発者木屋七郎右衛門に由来する。西横堀沿岸はかつて西横堀二十四浜と呼ばれ、材木商の集住する地域であった。

今橋一～五丁目　江戸期には今橋一～二丁目、尼崎町一～二丁目と呼ばれていた地域。江戸時代、今橋通りは大両替商を中心として、富商、巨商が軒をならべる一大金融センターであった。なかでも、鴻池善右衛門家は群を抜く存在であった。鴻池家が当地に両替屋を設置したのは延宝二年（一六七四）のことで、江戸後期には土地を買い増して、鴻池分・別家の店々が立ち並んだ。今橋一丁目には両替商天王寺五兵衛と平野屋五兵衛の店が向

いあって存在し、「天五に平五、十兵衛横町」といわれた。天五、平五とも十人両替の一員となった大両替商であったが、明治維新後は没落した。旧尼崎一丁目（現今橋四丁目）に懐徳堂があったことは周知のところであるが、旧尼崎二丁目（現今橋五丁目）には篠崎小竹がおこした梅花社という私学もあった。今橋一～五丁目と高麗橋一～五丁目を分かつ東西の通りは浮世小路と呼ばれ西鶴「好色一代男」にも出てくる風流の地であった。

高麗橋一～五丁目　高麗橋の由来は往古朝鮮国使来朝のため架けられたとも、往古の難波高麗橋が存在したためともいわれる。江戸時代は御公儀橋で、橋詰には矢倉屋敷があった。明治になってから、本木昌造の設計で大阪最初の鉄橋となった。江戸期には高麗橋一～五丁目のほか、上人町、四軒町、大豆葉町の町名が存在。呉服商、両替屋、書籍商、紙屋などが多かったが、なかでも越後屋はその筆頭で、元禄四年（一六九一）開業、その周近に小間物雑貨商を配して、百貨店的商法の先駆けをなした。伊勢商人の大黒屋富山、近江商人のます屋岩城、大和商人の河内屋なども有名な呉服商であった。高麗橋一丁目には秤の一手製造・販売を行った秤屋が存在した。明治以降は大阪商法会議所、大阪内外綿木綿取引所が設置されたほか、第三十四、第百三十、国立銀行の本店がおかれた。

伏見町一～五丁目　伏見町人で開発したことに因む町名。江戸期には伏見町のほか、本勤町、本天満町、呉服町と称えた。本勤町、本天満町は江戸初期に天満鳴尾町の魚商人が移住したことに因む。一六一〇年代に魚商人は西船場に移り、町名だけが残った。江戸期には、加賀屋一統と呼ばれる唐物問屋の多かったところ。そのおこりは天正年間に加賀の国の人斎藤九郎右衛門が秀吉に従って大坂に来り、唐産茶番御用を勤め、伏見町に住地をさずけられたことによるという。その後斎藤氏の分別家はいずれも加賀屋を名乗り、長崎からの輸入品を一手に取扱った。岩井文助（岩井産業から日商岩井へ）も加賀屋一統の出である。旧呉服町は伏見の呉服商が集住していたところであった。

道修町一～五丁目　道修町の名称の由来については諸説があるが、往古、当地が谷状の地形をなしていて「道修谷」と呼ばれていたことによるという説が有力。江戸期には又市町、四十軒町、古手町などの町名もあった。道修町といえば薬の町であるが、薬種問屋が集住するようになったのは、寛永年代に堺の小西吉右衛門が将軍

の命により道修町一丁目に来り薬種問屋を開いたことによるという。享保期には薬の町として確立し和漢種改所、仲間寄合所などが設けられた。道修町の薬種商には今日薬品メーカーとして存続しているものが多い。田辺・武田・塩野・小野・小西などである。道修町には「神農さんの御祭」という秋祭りがある。少彦名命神社の祭りであるが、当社がもともと中国の医薬の祖、神農氏を祀っていたことによる。元禄の俳人小西来山は薬種商小西一統から出た人、また、明治の俳人島道素石や、青木月斗も薬種問屋の生れであった。

平野町一～五丁目　御霊神社の祭神は一説に、早良親王であるといわれている。早良親王は百済の出で、この百済氏を祭る神社に京都平野神社がある。したがって早良神社を祭る御霊神社の界隈という関係から平野町と称えられたという。江戸期には善左衛門町、亀井町などの町名もあった。当地には、江戸時代に北組惣会所のほか、両替商炭屋彦五郎、酒商米屋喜兵衛（沢の鶴）の店があり、明治末ごろまで、平野町商店街として市内屈指の日用品小売市場として栄えた。

淡路町一～五丁目　江戸期には淡路町一～二丁目のほか、北鍋屋町、中船場町、淡路町切町、津村北之町などがあった。御霊神社、一名円神社、円江神社は当町にある。明治中期から大正末までには植村文楽軒の御霊文楽座がおかれていた。

瓦町一～五丁目　江戸期には瓦町一～二丁目、百貫町、南鍋屋町、三郎右衛門町、津村東之町、同中之町、同西之町と呼ばれていたところ。津村はこのあたりが往古、入江になっていて、円江と称され、その転訛であると伝える。

備後町一～五丁目　江戸期には備後町一～五丁目、升屋町、御堂前町と呼ばれていた地域。当町の八百屋町筋あたりは鳥店が多かったところで、俗に鳥屋町と呼ばれていた。洋反物問屋、木綿問屋が多かった。備後町三丁目日本綿業会館は昭和初期の建築で、東洋紡専務岡常夫の遺産寄付をもとにして建設されたものである。

安土町一～五丁目　近江商人の出身地に因む町名と伝えられる。江戸期には魚屋町、南青谷町、北青谷町、御堂前町、浄覚町などの町名もあった。近江商人、糸ヘン関係商人が多い町であり、田村駒、大橋、寺庄、外村、中島弘、伊藤万などが有名である。

本町一～五丁目　江戸時代から今日にいたるまで繊維・衣服関係ビジネスの中心地である。江戸時代には古

手商が多かったが、明治以降は呉服、繊維商社が多くなった。また近江商人の店が多かった。丸紅、西川、稲西屋、田附政治郎、阿部一族らが有名な例である。津村別院、いわゆる北御堂は慶長二年（一五九七）准如が津村の地に建てた津村坊舎をもととする。明治初年には官軍の本営や大阪鎮台の仮営所、大阪府会議事堂となった。相愛学院は明治二十一年、津村別院の一部を校舎として開校されたものである。

南本町一～五丁目　江戸期には北渡辺町、南渡辺町という町名もあった。本町と同じく伝統的に糸ヘンの町である。

唐物町一～五丁目　江戸期には雛屋町、南渡辺町の町名も存在。当地の豪商としては山口吉郎兵衛家が有名。同家は代々奈良の太物問屋であったが、文政期に唐物町に出て、布屋と号し、オランダ、中国との洋反物の取引を行って財をなし、幕末期には両替商を開業、明治期に第百四十八国立銀行をおこし、三和銀行の前身の一つ山口銀行のもとを築いた。

船場中央一～五丁目　昭和四十五年一月一日に誕生した町名。井池商店街を立退きさせ、中央大通りを拡張し、高速道路下にビルを設け、船場の過密と交通マヒを解決し、同時に近代的流通センターとする都市計画構想に沿って行われた。昭和四十五年に船場センタービルとしてオープンし、繊維・服飾関係産業の新しいセンターとして生れかわった。

北久太郎町一～五丁目　南久太郎町一～四丁目　久太郎町の町名の由来については、もと百済町と書いていたのを後世誤り伝えたという説と、秀吉の麾下の堀久太郎の邸であったことによるという説とがある。北久太郎町四丁目の難波別院、いわゆる南御堂は、慶長元年（一五九六）道修町一丁目におこされたが同三年当地に移ったもの、明治期には太政官代、西南戦争征討総督本営などがおかれた。また明治四十二年に創立された大谷女学校は大正十四年まで南御堂内にあった。北・南とも久太郎町は繊維、衣服関係の商店の多い町で、またかつては塗師職、漆器商、唐小間物問屋も軒をならべていた。南久太郎四丁目は松尾芭蕉終焉の地としても知られている。

北久宝寺町一～五丁目　南久宝寺町一～五丁目　久宝寺の町名の由来は、往昔久宝寺という寺が存在していたという説、近世初期道頓堀川を開削するとき、河内渋川郡久宝寺村から多くの人々が来たり、その住地となったことによるという説とがある。江戸期には、南北久宝寺

には伝馬町、源左衛門町、上難波北之町、同南之町などの町名も存在した。南北久宝寺は伝統的に小間物雑貨商の多いところで、今日もその風情を残している。

渡辺町　昭和五年に生れた町名。天正年中、渡辺（八軒家）にあった座摩神社がこの地に遷座し、氏子の人々が移住したことを町名の由来とする。

博労町一～五丁目　江戸期には金沢町、金田町、茨木町、博労町、上難波北之町、同南之町などと呼ばれていた。博労町の名は、かつて伝馬の馬持が多かったことによると伝えられる。五丁目の難波神社は天正年中におこされたといわれ、通称博労稲荷と呼ばれてきた。御霊神社に移る以前、文楽座は当社に存在した。大阪心学七舎の一つ明誠舎も博労町二丁目（旧金田町）にあった。

南船場一～四丁目　昭和五十七年、住居表示に関する法律に基づく町名改称により生まれた町名である。かつては順慶町一～四丁目、安堂寺橋通一～四丁目、塩町通一～四丁目、横堀七丁目、末吉橋通一～四丁目、長堀橋筋一～二丁目、鰻谷東之町、同中之町、同西之町、心斎橋筋一～二丁目、北炭屋町と呼ばれていた地域である。順慶町は筒井順慶の屋敷地に、末吉橋通りは末吉孫左衛門・勘兵衛に、安堂寺橋通りは安曇寺に因むと伝えられる。

（大阪大学助教授）